慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	「民間雑誌」編集長中上川彦次郎の書翰について
Sub Title	
Author	西澤, 直子(Nishizawa, Naoko)
Publisher	慶應義塾福澤研究センター
Publication year	1995
Jtitle	近代日本研究 Vol.12, (1995.) ,p.261- 264
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	資料
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10005325-19950000-0261

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

近代日本研究第十二巻（一九九五年）

「民間雑誌」編集長 中上川彦次郎の書翰について

西澤直子

福澤研究センターは、一九九五年の七夕大古典籍入札会において一通の中上川彦次郎書翰を入手した。それは明治十一年四月四日付で、中上川が丁度「民間雑誌」の編集長を務めていた時のものである。書翰は「民間雑誌」の一読者（福田甚助）からの質問状に応えて書かれた。

「民間雑誌」編集担当者宛福田甚助書簡

馬脾風ノ一症両三年前ヨリ
各区ニ発リ当十一区昨秋ノ頃
殊ニ多〔三四歳乃至八九歳〕
死ニ就ク児童不少頃日再ヒ
萌芽ノ模様子ノ為ニ親タルノ
人々大ニコレヲ愁トイヘトモ術ナシ
歎生声市ニアフレ拠テ貴社ニ
訴フ奇薬妙術御探得ル
事モアラハ世上患者ノタメニ
広告アランコト是祈
十一年三月廿五日
東京三田
慶應義塾
出版社御中

この質問状に対する中上川彦次郎の返書は以下の通りである。

三月廿五日附を以て御報
知之馬脾風の一症
云々ハ当今専ら申し
はやし候ヂフテリヤ病
ニ而ハ無之哉ニ被存申候
右ハ先日衛生局より報
告有之予防法之大略
記載致し有之候右報告書
ハ当社雑誌三月廿七日同廿八日
両日之同局録事欄中に
登録致し有之候ニ付疾く
御覧済之事と存し別
段不申上候
右貴報まで如此御座候
早々拝復
東京
十一年四月四日
民間雑誌
編輯所
中上川彦次郎
福田甚助様
梧右

封筒（表）「羽後国秋田郡　五十目村　福田甚助様」
（裏）「十一年四月四日　東京三田二丁目十三番地
慶應義塾　中上川彦次郎」

右二通の書翰から次のようないきさつがわかる。秋田郡五十目村（現秋田県南秋田郡五城目町―ごじょうめまち―）の福田甚助なる人物から慶應義塾出版社に、近年馬脾風なる病気が流行って困っているので、その対処法がわかれば広告してほしいという依頼が届いた。(1) それに対し当時慶應義塾出版社で「民間雑誌」の編集長をしていた中上川彦次郎が、馬脾風とは恐らくジフテリヤのことで、ジフテリヤに関しては既に「当社雑誌」に記事を掲載したので、それを参照してほしいと答えたのである。(2)「民間雑誌」の明治十一年三月二十七日と二十八日付第百四十五および百四十六号を見ると、第一面の衛生局録事欄に内務省衛生局報告第七号としてジフテリヤ病の概要と「予防心得」が掲載されていた。

「民間雑誌」はその目的に、この往復書翰に見られるような地方の読者との交流をうたっていた。福澤が執筆した緒言にいわく「我輩都会の地に居て田舎民間の事情を知るに由なし。若し田舎に有志の士あらば、左の箇條に付、地方にて聞見せし次第と事柄に付、不審なる次第と、人民のために願ふ可き次第とを、廉書に記して当社へ報じ給はる可し。社の記

者は諸方の報告を参考して、これを西洋の諸書に質し、其義を意訳して、勉めて報告の旨に答ふべし。[3]」

ここからわかるように福澤は、地方からは現状に関する情報を得、地方へは正しい情報を提供し啓蒙することをこの雑誌の使命としていた。その意図がこの往復書翰にはまさに表れている。福澤の考え通り、慶應義塾出版社が情報センターとしての役割も果たしていたことが実証されたといえる。

ところで「民間雑誌」は一度終刊し、二年ほどして復刊されている。初刊は明治七年の二月で、緒言によれば「毎月三、四度づゝ」の予定であったのが不定期となり、明治八年六月に終刊を迎えた。次にこれを体裁的にも内容的にも受け継いだかたちで、明治九年九月「家庭叢談」が刊行された。福澤は「近来諸方に雑誌新聞の類出板多けれども、中に就いて雑報雑記などいふ箇條を見れば、……其文面如何にもきたなくして、家族親子の間にて読に苦しきものなきに非ず。……今この冊子には全く斯る醜体を脱し、家内朝夕親子物語の種にもなるべき事柄を記さん」ことから表題に「家庭」の文字を配したと述べている。[4]発行回数は月十回であった。更にこれが明治十年四月に再び「民間雑誌」と改称された。明治七年から八年にかけて刊行されたものと区別して再刊「民間雑誌」と呼ばれている。表題が「民間雑誌」に戻る際、体裁が変わり新聞型になった。今回の書翰に関係する「民間雑誌」はこの再刊「民間雑誌」で、雑誌と銘打ちつつも、その実体は新聞であった。はじめは週刊であったが、福澤は日刊にすることを目指しており、次第に間隔が狭められ、中上川を編集長に迎えると同時に明治十一年三月一日より日刊となった。

このように形態は変化したが、先に述べた地方読者と情報交換を行なうという編集方針は「民間雑誌」「家庭叢談」再刊「民間雑誌」の三誌に貫かれていた。この独自でユニークな試みは、明治十一年五月十九日に掲載された社説「内務卿の凶聞」をめぐって警視局の干渉を受け、再刊「民間雑誌」が廃刊になった後は、明治十三年知識交換、世務諮詢を目的として発会した交詢社の機関誌「交詢雑誌」に受け継がれていく。

注

(1) 馬脾風（ばひふう）はジフテリヤの漢方名。

(2) 中上川彦次郎は福澤諭吉の甥で、明治二年より慶應義塾に学び、慶應義塾、中津市学校、宇和島の洋学校などで教鞭をとった後、明治七年十二月より十年十月までロンドンに留学した。帰国後「民間雑誌」を日刊とすることを目論み、人材を探していた福澤に乞われて、十一年三月一日編集長に就任した。福澤は中上川と「民間雑誌」に大いに期待を寄せており、明治十一年一月十日付松倉恂宛書翰では「当出版局にて発兌いたし候民間雑誌も主任の者無之、不都合に候処、今後は小幡中上川も力を尽すべしと

申義、左様相成候はゞ新聞らしき新聞も出来可申、御覧可被下候」と述べている。また就任後の四月六日付中川横太郎宛書翰には「中上川彦次郎と申者、竜動へ三、四年留学の末帰国、主任として毎日の発兌を企候義に御座候。何卒御社中へ御吹聴、該誌の流行御周旋奉願候」とある。（書翰の引用は『福澤諭吉全集』第十七巻二二一から二ページおよび二三四から五ページ）。

（3）『福澤諭吉全集』第十九巻五〇七ページ。

（4）『福澤諭吉全集』第十九巻五五七ページ。

（にしざわ　なおこ　福澤研究センター嘱託）